
「家族とカレーライス」

源五郎丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「家族とカレーライス」

【Nコード】

N2524Z

【作者名】

源五郎丸

【あらすじ】

春見市の駅前にある高校「春見女子高校」に通う「間下 芳美」ました よしみは、喫茶店「ル・パレイ」でバイトをしている。店長の「小塚 武大」こづか たけひろ、バイトの先輩「小坂 冬子」こさか ふゆこらと共に働いている。そんな中、一人の店の雰囲気になつかない柄の悪そうな男性が入店する。その男性が抱える問題に芳美が興味を持ち、どうにかしようと考え始める。

「家族とカレライス」前編

照りつける日差し。反射するアスファルト。

7月となり、気温は上昇を続け、バイト先へ向かう私の足も重くなる。

今日は猛暑日で快晴。天気予報の気温よりも体で感じる温度はもっと高いだろう。

私、ましたよしみ間下芳美は暑いのが苦手だ。

汗をかいて体がべた付くことも嫌いだし、体が暑さで気怠くなってくる。

今日は高校が創立記念日のため、休校で家からバイト先の喫茶店へ向かっている。

私の家はバイト先の喫茶店の春見はるみ駅前から少し離れているため、バスでの通勤となる。

ただ、高校が同じく駅前の春見女子高校に通っているため、平日であればバイト通勤が大変と言うことはない。

平日は高校があるが、バイト通いが楽であり、休日祝日は高校が休みだが、バイト通いが大変。

完全な休日以外はどちらにしても大変である。もちろんバイトや高校がづらいという話ではないのだが、

この暑さの中、家からバス停まで行くのが面倒臭い。そう思ってしまうのである。

しばらく待つと、駅前行のバスがバス停に着く直前であった私の目に映った。

「こんにちはー」

「ああ、こんにちは」

バイト先の「喫茶ル・パラディ」に着くと、この店の店長・小塚武大こづかたけひろさんが挨拶を返した。髪型は短めでそれを少しだけセットしており、不精髭が少し生えている。

どこことなくダンディな雰囲気で、若者にも嫌われなそうな格好である。

今は喫茶店の男物の制服を着ているが、私服は見たことがない。何となくだが、私服も渋そうな勝手なイメージが私にはあった。

「おはよう。もっと早く来てくれて開店前の手伝いをしてくれると助かるんだけど」

「あ……すみません、冬子さん」

そうハッキリと髪の短い目つきの鋭い女性が答えた。

「こなかふゆ」
小坂冬子さんである。

高校を中退しており、それからずっとフリーターをしており、何箇所かバイトをした後、一昨年の冬頃からル・パラディで働いていると聞いている。

目つきが悪く、サバサバとしているが、仕事が早くて、

春先からバイトを始めた私をフォロワーしてくれたのを覚えている。

私服は見たことがあるがあまり派手な格好が好きではないようで、落ち着いた色合いの服装をしていた。

もちろんもう店内の準備に手を付けているので、女性物の制服を着ている。

「すみません。今日は両親が朝早かったので朝の間に家事を済ませないといけなくて……」

「気にしなくていいよ。もうすぐ開店だから、準備をしてきてもら

えるかな？」
「あ、はい」

そう武大さんに告げられると私はホールの裏のスタッフルームに入り、

更衣室で制服に着替える。

ル・パルデイの制服は本当にシンプルなもので、
シャツに蝶ネクタイとチョッキ、スカートに前掛けのみで、
シャツ以外が黒で統一されている。

可愛らしいとは言えないが、私はとてもここの制服は好きであった。
着てきた私服を脱ぎ、手早く制服を身にまとう。

そして、細かい箇所を更衣室の鏡で整えると、ホールへと向かった。

ホールに戻る。

ホールはカウンター席、ボックス席に分かれ、喫煙席と禁煙席でわかれているが、

そこまで広いと言える店ではなかった。

しかし、店内の雰囲気は落ち着いており、それをこのんでくるお客さんはいるようだ。

ただ、そこまでお客さんで一杯になる風景を私は見たことはない。

「ギリギリね。もう少し余裕をもって仕事に入れるように気を付けないさい」

「す、すみません」

ホールに着くと冬子先輩に注意をされた。

10時開店で、現在の時刻は9時50分。

慌てて注文を受けるハンディを前掛けのポケットに入れ、

出勤表に自分の名前と時刻を記入した。

とはいえ、ル・パラディは個人経営の喫茶店で、総従業員は私たち3人しかいない。

事務作業などは武大さんと冬子さんと全部行っているらしく、冬子さんもバイトのはずなのにほぼ毎日のようにシフトを入れていくようだった。

「まあ、開店前からお客さんが並んでいるほどの人気店ではないから、別にそこまでしなくていいよ」

武大さんは基本的にマイペースでゆっくりしている。

別に開店時間がずれたりするわけではないのだが、

そこまでお客さんが来るわけではないため、

あくまでこのバイトを楽しんでくれればいいと思っているようだった。

5

「いえ、確かにここは開店前のあいさつとかありませんけど、ある所がほとんどみたいなので、もっとしっかりしないとダメですね」

武大さんの趣味のような店ではあるが、もっとしっかりしなければいけない。

そう思い、少し深呼吸をして気分を入れなおす。

「ははは、そこまで緊張らなくてもいいんだよ？」

「いえ、バイトとは言え仕事である以上やる気を出してもらわないと困ります」

そんな冬子さんと武大さんのやり取り。

これが「喫茶ル・パラディ」の開店前の日常であり、ル・パラディの日常でもあった。そんな店を私は好きである。

？

店内に流れる80年代の懐かしいバラードやクラシックが店内の音と混じり合う。

お客さんが少しずつ入り始め、大盛況とは言えないが、少しずつにぎやかになってくる。

大体ル・パラディに来る客は、集団のお客さんが多い。

カウンター席に座り、武大さんと話をする人もいるのだが今日はいないようだ。

そのため、カウンター席ががらんとしており、一人も座っていない。そんなとき、カランと喫茶店の入り口ドアに付けられた鐘が鳴った。

「いらっしやいませー」

冬子さんは注文を取っていたので、私が入口に行った。

「……ここはタバコ吸えんの？」

金髪に虎の模様の入ったスタジャンにジーンズ。

目つきも悪く私には、何となくいわゆる「ヤンキー」と言う方なのだろうか、と思えた。

「はい、カウンター席と入り口右手のボックス席が喫煙席となっております。

空いている席にお掛けになって下さい」

何となくカウンター席が喫煙席と言うのは珍しいような気もするのだが、

武大さんがヘビースモーカーなのでル・パラディではそうなのだろうと考えている。

ガラの悪そうな男性は、喫煙席のボックス席の方を見ている。

あまり今日は喫煙者のお客さんがいらしていないので、ボックス席はがらりと空いている。

その男性は黙って一番奥のボックス席に座った。

あまりにもこういってお客さんが来るのが珍しいため、私は何となくチラチラ見ていた。

なんでこんな店に来たのだろうか。

ああいう人だと勝手な偏見ではあるが、駅前にあるファストフード店などに、

たまっていそうな気がするだが。

「間下さん。ボーっとしてないでそのお客様にお冷を運びなさい」

「あ、はい」

ボーっとしているのが見つかったようで近くに來ていた冬子さんに注意され、

お冷を取るために厨房の中へ向かった。

その後、お冷を渡したらカレーとアメリカンコーヒーをその男性は注文した。

何となく場に浮きすぎているため、仕事をしながら見てみると、

その男性はボックス席に家族連れで來ているお客さんを見ていた。

別にそれに対して嫌悪感を持っている様子ではなく、ただボーッと見つめていた。

何となく私にはそれが気になった。

カレーを平らげ、コーヒーを飲みながら煙草を吸っていたので、空になった皿を下げるために私はまたその男性の下へと足を運んだ。

「そちらのお皿をお下げしてもよろしいでしょうか？」

「ん？ …… ああ、いいよ」

曖昧に返事をする、新しいタバコに男性は火をつけた。

「なあ、あんた家族とは仲良いか？」

「はい？」

いきなり質問され、驚き聞き返してしまう。

「親とかいんだろ？ 仲良いのかよ？」

「ええ、仲は良いですよ？」

両親は共働きだが、不仲ではなく買い物に出かけたりもするので、おそらく同年代の中では仲の良い部類に入るのだらうと思いい、そう返答した。

「そうか。俺んところは両親と仲が悪いからな。何となく羨ましいわ。」

「はあ……」

このお客さんは家族と不仲だったようだ。

羨ましいという辺り、本当は仲良くしたいのだらうか。

それとも元々、家族関係とは無縁の家で育ってしまったのだらうか。

私の頭の中でそんな考えが巡り始める。

「ま、親御さんを大事にしるよ？」

「はあ……」

曖昧に返事をしてしまう。

どこか男性は寂しそうな顔をしていた。

「んじゃ、お会計頼むわ」

「あ、かしこまりました」

何故この人はそんな事をしゃべったのだろうか。

私の中で余計な考えが巡り始めるが、仕事をこなさなければならぬと、

気を引き締め直してレジへ向かう。

「カレーライス500円、アメリカンコーヒー350円。合わせまして850円になります」

「じゃあ1000円で」

「はい、1000円お預かりいたします。150円のお返しになります」

「あんがとよ、ごちそうさん」

マニュアル通りの対応。

レシートとお釣りをもらうとその男性はそのまま帰ろうとして私は思い出した。

「あ、会員カードはお作りになりますか？」

「あ？ そんなのあんの？」

「はい。ポイントがたまりますとコーヒーや料理が無料になったり

とお得ですよ」

笑顔で会員登録の事を知らせる。

ル・パラディでは会員キャンペーンをやっており、1000円で1ポイントがたまり、

100ポイント溜まるとコーヒーや料理500円分が無料になるのだ。

あまり流行っていると言えるお店ではないが、カードはスタンプカードなどではなく、

大手チェーン店が使うような電子カードである。

何故なのかは知らない。

「あー……なら頼むわ。たぶんまた来るだろうしなあ、カレー旨かったし」

男は頭を掻きながらそう答えた。

私はカード発行の書類を取出し、レジの上に置いた。

「では、そちらにお名前と携帯電話の番号とメールアドレスの記入をお願いします」

金髪の男は黙ってそれに記入していく。

名前は「林昌平こへいみさひら」というらしい。

「それでは会員カードはこちらになります」

「はいよ。また来るわ、たぶん」

すると男はカードを財布にしまつとそのまま帰って行った。

「またのお越しをお待ちしております」

男が帰って行ったが、私の中に何だかモヤモヤしたものが残っていた。

「家族とカレーライス」中編

「今日はお疲れ様。もう上がっていいよ」

いつの間にか日が暮れ、空が赤く染まっていた。

私は10時から18時の8時間のシフトを入れていたため、もう上がりの時間だった。

「あ、でも夜も時間がありますので手伝いましょうか?」

「いいよ、夜に来るお客さんは少ないから私だけで大丈夫だよ」

「そうですか?」

冬子さんは私と今日は同じ時間に上がる。

そのためこれから閉店の8時までには武大さん一人だけとなる。

ただ、夜にシフトが入っているときがあるが、

昼間の多少はいるお客さんより入る人がまばらになる。

それならば、武大さんなら一人でも大丈夫だろうと思った。

「それより、今日は何か考え事をしていたみたいだね?」

「え!?!」

「いや、仕事しながらもいつもより様子が違ったからね。凶星だったかな?」

「あ、はい……すみません」

あまりにも感づかれていたため、思わず仕事に影響していたのかと思いつつ、思い謝る。

「いや、別に責めているわけじゃないよ。ただ、考え事する癖は相変わらずみたいだね」

「はい……気を付けてはいるんですけど、中々この癖だけは治らなくて……」

私には昔からの癖が一つだけある。

何か気になることがあると考え込んでしまう癖である。

もちろんそれをぶり返して話題するなど、無粋な真似はしないが、気になって手が疎かになってしまふことが度々あるのである。

バイトを始めてから気を付けるようにして、手が付かなくなるということはなくなったが、

未だに気になると、考え事が抜けきらない悪癖があるのだ。

「いや、気になることをそこまで考え込めるのは良い事だと思うよ。

芳美ちゃんは研究者に向いてそうだね」

「はあ」

研究者と言われても、そういう事が気になるのではなくて、日々起こる人間の些細なしぐさや言動などに興味が行くのが私の癖で、

そういった物の場合、心理学などが範疇になりそうな気がした。

「気になっていたのは、あの金髪の男の人だろう？」

「そ、そこまでわかりますか？」

「うん、様子がおかしくなったのは、あのお客さんに声をかけられた前後からだからね」

武大さんは普通に仕事をしていたように見えたのだけけれど、この人はどんな洞察力をしているのかが非常に気になった。

「彼の事が、気になるかい？」

「え？」

武大さんからの唐突な質問。私は思わず聞き返してしまうが、

「まあ……気にはなりません」

自分の好奇心が勝り、素直に答えてしまった。

何か怪しい雰囲気が出ていたが、答えてしまった以上は仕方がない……と思うことにする。

「そうかい。安心して、怪しい事に巻き込んだりはしないから」

そう答えると、武大さんは会員登録書をレジから一枚取り出し、それを読みだした。

「ふんふん。林昌平さんね、なるほど。名前だけわかれば十分だよ」

どこか満足げな表情で武大さんは頷いていた。

私はどこか不安になりながら、ただただ武大さんを見つめるしかなかった。

？

それから数日後、今度は学校終わりの夕方のシフトに入った。

冬子さんも武大さんも店にいて、今は夕方の休憩中のようなだった。

「こんにちは」

「こんにちは。学校終わりに大変だね」

いつも通りに戻った武大さんが返事をしてくれる。

ル・パラディは午前10時に開店し、5時で一度だけ休憩で1時間だけ閉店となるのだ。

もちろんお客さんがいる場合はそのまま営業しているのだけれど、今日は二人いるということは、その時間帯にお客さんがいなかったのだろう。

それと、武大さんは以前と何も変わらないように見えるので、きつとあの不安は勘違いだったのだろう。

「いえ、武大さんや冬子さんは私が学校に行ってる間も働いてますから」

「別に私は一日中いるわけじゃないわよ。あんたよりシフトが多いだけだしね」

冬子さんはまかないとして夕食にカレーを食べているところだった。どうやら、シフトと言ってもほとんど毎日働いているようで、まるで正式に店で働いているようだった。

「カレーライス美味しそうですね」

「まかないよ。タダで食べさせてもらえるんだから、一番好みの物を食べるのが普通でしょ？」

「ああ、ここのカレーってかなりこだわってますから美味しいですよね」

「まあ、日本人ってカレーライス好きだからね。私も普通に家で作ったりしてるし」

冬子さんとはこうやってたまに話す。

現在21歳で一人暮らしをしているらしく、料理が上手い。

そのため、店長の武大さんの代わりに時々作っていたりする。

「カレーライスって家によって味が違うんですよね。」

だから友達の家で食べたりすると面白いんですよ」

「ふーん、私の家来てもバイトだけじゃ生活費ギリギリだから何も出さないけどね」

カレーを食べながら話す冬子さん。

冬子さんが作るカレーはどんな味なのかと思いつながら、

私は学校の制服からル・パラディの制服に着替えた。

「それじゃあ、開店しようか。夕方からのシフトよろしくね」

「はい、よろしく願います！」

開店からしばらくは、お客さんの数は少なく回っている。

そのため、私も冬子さんも武大さんも比較的楽に仕事できた。

そして、6時半頃、見知った来客が来た。

「いらっしやいませ……あ」

「よう、今日はあんまり客来てないんだな」

そのお客さんは「林昌平」さんだった。

「また来てくださったんですね、林さん」

「まあ、バイト終って腹減ったからな。このカレー気に入っちゃまってな」

初回に来た時より、リラックスした感じで入ってきた林さん。

この店を気に入ってもらえたなら何よりである。

「この店ってあんまり広くないので、何となくお客さんの顔一度見たら覚えちゃうんです」

「ああ、だから俺のこと覚えてたわけね。カードしか書いてないけど」

「あれ、全部うちの店だとパソコンに手で打ち込むので、割と名前も覚えちゃうんですよ」

「へえ」

「あ、喫煙席でよろしいでしょうか？」

「ああ、あと注文もカレーとアメリカンコーヒーでよろしく」「かしこまりました」

笑顔で対応する私。

席に着くと相変わらず、他の客をぼんやりと見つめながら煙草を吸っているようだった。

また家族連れの席を見ているようだ。

「間下さん、カレーとアメリカンコーヒーできたわよ。あちらのお客さんでしょ？」

数分後、お皿を洗っていると、冬子さんに声をかけられた。

「え？ 冬子さんがお配りすればいいんじゃないですか？」

「店長命令よ。まったく、武大さんも何を考えてるんだか」

私は何故わざわざ私に配らせるのか疑問に思いながら、仕事場所を冬子さんと変更した。

「お待たせしました。アメリカンコーヒーとカレーライスになります」

林さんの下へ私が配る。

林さんは注文の品が来ると、タバコを灰皿でもみ消した。

「ありがとう」

「ご注文の品は以上でよろしいでしょうか？」

「ああ」

「では、ごゆっくりどうぞ」

配膳が終わるとまだ仕事がある。

振り返り、仕事に戻ろうとすると、

「なあ、家族と仲直りするってどうやったらいいんだろっな？」

林さんが突然話しかけてきた。

「え？ 時と場合によるとは思いますが、素直に謝ればいいんじゃないでしょうか？」

「そういう問題じゃないんだよね。俺んち両親共働きんだけど家庭崩壊中だし、

親父とお袋が仲悪いのよ」

寂しそうな表情で林さんが答える。

何となく自分を笑っているような表情だった。

「それでんな環境に我慢できなくなった俺がぐれちまって、今じゃ俺達と一緒に住んでるだけで仲は最悪。

どっちも俺のこと気にはかけてくれてるみたいだけど、

悪化させたのは俺だし、今更どの面下げて謝ればいいんだかな？」

林さんは語った。

何となくだが、家族思いな人だということはひしひしと伝わってくる。

「昔は仲良かったんだけどなあ。どこでこうなっちまったのか今ではもうわかんねえや」

私は林さんの言動を思い直してみた。

家族連れを見つめていた林さん。

ひよっとしたら昔の自分の家族と重ねていたのかもしれない。

きっと私が想像する以上に、彼にとっては重大な問題で、

どうにかしたいと思っただけでも何ともできない気持ちなのかもしれない。

私は考えれば考えるほど、分からなくなってしまう、答えられずにいる。

「昔はお袋が作ったカレーを家族全員で笑いながら食べてたっけな。懐かしいや」

悲しそうな笑顔を浮かべる林さん。

私は何も答えられず、俯いてしまっていた。

「あ、仕事中に愚痴って悪かったな。仕事の邪魔しちゃいけない」

「いえ……こちらこそお力になれずにすみません」

「いいんだよ、何かあんたって話しやすそうだったからうっかり話しちゃったよ。悪いね」

林さんはそういってカレーを食べ始めた。

(思い出のカレーライス……かあ)

私も答えが出せなかったことに悶々としながら、仕事に戻った。しばらくして、林さんはカレーを食べ終わると、お会計をお願いした。

「何か申し訳なかったな、今日は」

「いえ、お気になさらないください。合計で850円になります」

「じゃあ、1000円で。あとカードな」

「はい、カードと150円のお返しになります」

「んじゃ、また機会があれば来るよ。それじゃあな」

入り口に向かい、後ろ向きに手を振る林さん。

その背中から、もう二度とこの店に来ることはないだろう、という予感が私にはした。

「あ、お客様。少しお待ちください」

武大さんの声が聞こえて、林さんと私が振り返る。

武大さんは何やら袋を抱えていた。

「いや、カレーの材料が余ってしまいましたね。

捨てるにはもったいないので、貰って行って頂けませんか？」

武大さんの中から玉ねぎなどの材料を見せた。

間違いなくこの材料からはカレーができるだろう物が揃っていた。

「でも、俺んちは……」

「あ、思いつきました！」

断ろうとした林さんの返事をかき消すように私の中にある考えが浮かんだ。

「林さんがご両親にカレーを作ってあげてください。その時に昔の話でもしてあげれば、

きっとご両親も考え直してくれるかもしれません。」

そう、林さんの脳にあれだけ焼き付いているカレーライスの思い出なのである。

両親が覚えていなくても、きっとそれで何か感じ取ってくれるものがあるはずだ。

そうなれば、謝るきっかけも両親の仲を取り持つことができるかもしれない。

どう謝るかは林さんしただけけれど、きっとうまくいくと私は思った。

「どうですか？ それなら謝るきっかけもできますよ？」

「でも、俺カレーなんて作ったことねえし……」

「ご両親は共働きでしたよね？ 今7時10分なので、急いで帰れば夕食を作って迎えられるかもしれません。

ですから早く帰ってご両親にカレーを作ってあげてください。

上手い下手なんて二の次ですよ。気持ちがかもっていければそれが一番です。」

まるで断りを入れさせないように、一気に私は喋った。

「……」

林さんは私に促され、カレーセットを武大さんから受け取っていた。そして、頭を軽く掻きながら答えた。

「えーっと……作るかどうかは別として、とりあえずもらってくわ。」

食費は浮くだろうし」

林さんは迷っているという表情をしている。
でも、受け取ってはくれた。

これから先は林さん自身が何とかしなければいけない問題である。
私たちがこれ以上口を出してはいけない。

「まあ、とりあえず貰って行くことにするわ。んじゃ、また機会があれば」

そして、林さんはお辞儀をしながら店を後にした。

心の中で林さんがカレーを作ってくれる事とうまくいく事を願っていた。

「あれ？ そういえば店長あの会話聞いてました？」

「いや、厨房にいたから聞いてないよ」

「じゃあ、なんでカレーを作ってあげるなんて気配り思いついたんですか？」

「昔の知り合いを使って彼の事を調べたからね。名前だけでも結構色々わかるんだよ？」

私は武大さんとその知り合いという人に恐怖感を感じた。

この人はいったい何者なのだろうと言う、違う違和感が残った。

「家族とカレーライス」後編

林昌平は自宅にたどり着いた。

家に着いたのは7時45分くらいになっていたが、両親は共に帰っていないようだった。

自宅のカギを開け、家に入る。

昌平の家はリビングダイニングなので、広く感じる居間へと出た。手に持ったカレーの材料を、とりあえずキッチンに置く。

(カレーか。あの店員は俺に作れって言ってたけど……)

昌平は、袋から何気なしに玉ねぎを取り出して見つめていた。

最近の母は料理をしてはいるが、簡単に作れる物を手早く作って、一緒に食べることもなく仕事に行ってしまう。

父は母が作った冷えた物を温めなおし、それを食べていた。

夕食は帰ってきて自分で買ってきた弁当を食べたりしている。

母の愛情のこもった料理はもう二度と食べられないのだろうか。

昌平はそんなことを、玉ねぎを見つめながら、考えていた。

(ま、たまに作ってやるくらいならいいだろ。カレーなら日持ちするしな)

結果として彼は芳美の考えを実行することとした。

あまり料理などしないため、ジャガイモやニンジンの皮むきだけで苦労した。

すると、玄関の開く音が聞こえた。

「あら、昌平？ 何をしてるの？」

母が帰ってきたようだ。
手には明日の朝食の材料が入っているのだろうビニール袋を抱えていた。

「いや、なんつーか……その、たまには料理でも作るうかと思っ
な」

「この材料はカレーかしら？　でも珍しいわね。どうかしたの？」

「いや、何でもねえよ」

「そうなの？」

どこかいぶかしげな表情で母は昌平を見ている。

「なあ、お袋。もう飯食っちまったか？」

昌平は少し緊張しながら母に聞いてみた。

これで食べてきてしまっていれば明日の朝食がカレーになるだけで、
終わってしまう気がしていたからだ。

「え？　いえ、今日はまだよ。仕事が思ったより長引いたからね」

「なら、作ってやるから一緒に食おうぜ？」

「え……」

母が驚いたような表情をしている。

昌平がそんなことをするのは初めてであるし、最近は何をきいてな
かったかもしれない。

だが、やり始めた手前、もう彼の気持ちは変わらなかった。
とりあえずやるだけやってみよう、と。

「そうね。せつかく昌平が作ってくれるんだもの。一緒に食べまし
よ？」

母が笑顔を見せる。
いつも眉間にしわを寄せている母のこんな笑顔は、久しぶりに昌平は見た気がした。

「あ、でも見ていて危なっかしいから、私も手伝うわ」

母は仕事鞆を椅子の上に置き、ジャケットをテーブルの椅子に掛ける時、

キッチンへと入ってきた。

「あ、んじゃ作り方教えてくんねえかな？ 俺料理しねえからわかんなくてよ」

「ふふ、じゃあ教えてあげる。」

そう母が横で笑ってくれる。昌平にはそれだけでやった価値があったと思えた。

その直後、再び玄関が空く音が聞こえ、父がリビングへ入ってくる。その瞬間母の雰囲気少し冷たくなるのを、昌平は感じていた。

「何をしているんだ、お前ら？」

父がなんだか戸惑ったような表情をした。

手にはコンビニで買った弁当が入っているのが見えるビニール袋を持っていた。

「昌平がカレーを作っていたみたいだから、私が一緒に作っていたのよ」

「そうか」

そっけない会話。

でも、いつものようにすぐに喧嘩が始まるような雰囲気ではなかった。

「なあ、たまには家族全員で飯食わねえか？」

「え？」

「いや、何となくいつも親父がその辺で買ってきた弁当食うのも、何か気になるしさ」

父はぽかんとした表情をしている。

昌平はどこか恥ずかしくて野菜を見つめながら、聞いていた。

「いや、昔はよく家族でお袋のカレーが旨いって親父も言ってたじやんか。

あの頃みたいにもう一回飯が食ってみたいなって思ってたよ」

俺はニンジンを見つめながらポツポツと告げた。

「俺にはなんでお袋と親父が仲悪くなったのかは知らねえけどよ、俺もお袋のカレー旨いと思ってたんだよ」

両親は止まったように立ったまま、俺のつぶやきを聴いている。

「だから……何となく作ってみたくなった。そんだけなんだけどな」
他にも色々言う事があったはずだった。

だが、昌平は恥ずかしくなってしまう、誤魔化すために苦笑いしながら、両親の顔を見た。

「昌平……」

両親が昌平を見ている。

少しだけ時間が経つと、二人とも、

「そうだな、久しぶりに3人で食べようか」

「そうね、家族揃って食べるのなんて何年ぶりかしらね？」

両親二人とも笑ってくれた。

昌平はそこになって初めて、心の底から笑えた。

カレーが完成し、母と昌平が配る。

父がそれを見ると「旨そうだなあ」と笑いながら言ってくれる。

母は「私の作り方教えたから美味しいはずよ」と父に笑いながら言う。

昌平は黙って笑顔でそれを見つめていた。

カレーが食卓に並ぶと、自然と今までの間を埋めるように、みんなが笑顔だった。

父が仕事の不満を笑いながら言い、母がそれに乗るように仕事の不満を笑顔で言う。

昌平には仕事の話はよくわからないが、そんな話題をしたら普段なら喧嘩するはずだ。

それを笑いながら話してくれている。

昔のようだった。

小さい頃の母のカレーを笑いながら美味しくそうに食べる父。

それに笑いながら答える母。

そして、手元には美味しかったカレー。

カレーだけは自分で作った物のため、母に敵わないがそれでも幸せだった。

こんなのは今日一日だけかもしれない。

でも昌平が本当に望んでいる物がわかった。

（俺は、家族が昔みたいに笑っている家族に戻って欲しかったんだな）

そんなことを思いながら、林家の食卓には久しぶりに笑顔が満ちていた。

？

林さんが帰ってから1週間後、再び林さんがル・パライディに訪れた。ただ、林さんは一人ではなく、ご両親とやって来た。

そして、金髪だった髪を黒に染め、服装も悪そうな服装から普通の服装に変わっており、

ご両親と仲良さそうに話をしながらカレーを食べて帰って行った。

「林さん、家族と仲直りできたみたいだね？」

私が休憩に入っていると、タバコを吸うために武大さんがスタッフルームにやって来た。

私に声をかけると、タバコを一本取出し、火をつけた。

「そうですね、なんだかとても幸せそうでした」

「そうだね、家族ってというのは些細なことで壊れてしまうこともあるけれど、

ほんの些細なことでもまた元に戻ることもあるんだよ。

もちろん全部の家庭がそうじゃないけど、彼の家はそれで直る事情だったんだね」

タバコの煙をくゆらせながら、武大さんがつぶやく。

「誰にでも思い出の料理がある。彼の場合それがカレーライスだったんじゃないかな」

「武大さんにも何か思い出の料理はあるんですか？」

「うーん……内緒かな」

「え、気になりますよ」

「そういう間下さんには何か思い出の料理とかあるのかな？」

「私ですか？ お母さんが作ってくれる料理なら何でも思い出の料理かもしれません」

「はは、きつとそう思っていてくれたらお母さんは喜ぶよ」

武大さんはタバコを灰皿でもみ消す。

今ホールと厨房には冬子さんしかいない。だから急いで一服に来たようだった。

「あ、そういうえば」

「ん？」

私がつと気になったことを口にした。

「武大さんはひよつとして調べた後、それで林さんの家庭が直ると分かってたんですか？」

「うーん……それは、どうだろうね？」

曖昧に答えた武大さんは、厨房に入っていく。相変わらず謎が多い人だと思った。

武大さんと入れ違いに、今度は冬子さんが両手にコーヒーを持って入ってきた。

「はい、コーヒー。飲むでしょ？」

「あ、いただきます」

冬子さんは右手に持っていたコーヒーを口にしながら、私にコーヒーを手渡す。

そういえば今はホールの方が静かだ。

ホールに一人で大丈夫と言うことは、今はお客さんがほとんど入っていないのだろう。

私も一口飲むと武大さんがこだわっているコーヒーの良い香りが鼻をくすぐる。

美味しいコーヒーだと、素直に思った。

「今回あんな大活躍だったじゃない。別に売り上げに影響するものでもないけど」

コーヒーを飲みながら冬子さんが声をかけてきた。

「いえ、そんなことはないですよ」

「ま、人の役に立つことは良い事だし、よくやったんじゃない？」

あまり興味がなさそうにはあるが、冬子さんが褒めてくれた。

「あ、そういえば林さんはなんで私に話しかけたんでしょうね？」

そこだけ不思議です」

素朴な疑問だったが、冬子さんに聞いてみた。

冬子さんは私の方を見つめている。

「あんたって、自分がかかり話しかけられやすいタイプだって自覚はないの？」

「え？」

私はその返答に驚いた。

そんなことを自覚したこともないし、思い当たる節が何もない。

「あんたって道をよく聞かれたり、勧誘とかよくされたりしない？」

「あ……言われてみれば、よくそう言うのに声かけられます」

「何ていうんだろうね。あんたって人が良さそうだから、

声かけ安そうな雰囲気してんのよ。実際お人好しなところあるから対応もいいしね」

「そ、そうなんですか？」

「そうよ。でも、そんな無自覚だとそのうち悪い男に声かけられて痛い目見るよ？」

その言葉が、褒められているのか、馬鹿にされているのかがわからない。

だが、どうやら他人から見ると声をかけやすそうなタイプらしい。

言われてみてよく思い返してみると、

確かにそういう事は少なくなかったような気もしてきた。

「そういう事だから、あの時林さんのテーブルにわざわざ武大さんは、

あんたを行かせたわけね。なるほど」

なぜか納得したように、冬子さんは頷きながらコーヒーを飲む。

そして、スタッフルームのテーブルの上に置いてあったチョコレートを一つ手にした。

「あ、そういうえば、あんたは何で武大さんが店長って呼ばれるのを嫌うか知ってる？」

「え？」

唐突に冬子さんが質問してきた。

武大さんは何故か「店長」と呼ばれることを嫌っている。私がバイトを始めたとき、それを何度か言われ、「武大さん」と呼ぶされたのだった。

「いえ、分かりませんけど……」

冬子さんは椅子ではなくテーブルに腰を下し、いたずらっぽく笑った。

「あの人、前の職業で『何とか長』って呼ばれる立場だったらしいんだけど、

それにうんざりしてるみたいだから、らしいわよ？」

「え……」

「ついでに言うと、友人に凄腕の探偵とか刑事とか弁護士とか医者とかいるのよ？」

「確か他に春見市市議会議員の知り合いも何人かいるみたいね。」

私はあまりの話に茫然としてしまう。

間違いなくポカンとした表情をしているだろうと、自覚していた。

「武大さんが前に何の仕事してたかは、知らないけど、あんた気にはならない？」

「ほら、あんた考えるのが癖でしょ？」

「い、いえ……さ、さすがにそこまでは……」

正直に言えば、そんなすごい人だと思ってもいなかったけれど、それ以上に武大さんの裏の顔に突っ込んでしまうと、

何か恐ろしい事に巻き込まれそうで、欲求より恐怖が私の中で勝ってしまっていた。

「ま、普通に接していればいい人だし、自分から首を突っ込んだりしないようにね」

そんなこと言われるまでもなかった。

いくら考え癖があり、お節介だと自覚していても、自分から危険なことに首を突っ込む趣味はない。ただ、

(武大さん……あなたいつたい何者ですかー!?)

そう心の中で叫んでしまった。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2524z/>

「家族とカレーライス」

2011年12月8日23時55分発行